主として戦後牛を飼い始めた農家が，東関東的なやや遅れた農業基盤の上に全く異質の乳牛を置いた形ではあるが，存続し，地域に影響を与えて来ている。町全体としての農業は主穀，雑穀が中心で一般の近郊農村の概念からはずれるが，八千代町が宅地化の進行で代表される近郊に位置していることも事実であり，酪農は地域の一現象として地域性のいろいろな面を示めしているのである。

以上，まとまりのないものになってしまったが要約である。

やる気になってアクセルを踏み過ぎたきらいがあった時，急ブレーキをかけてそのまましばらく進行を中止した時があったが，今さらそうしたむら気や，その要因となった力不足，努力や不足をとやかく云っても仕方あるまい。感想はいろいろあるが，予想以上に私にとっては勉強になったということで含まれよう。調査中行なっていることの位置付けがなされなかったことは失策であったと思う。

犀川丘陵東南部の地形と土地利用

―麻績盆地を中心として―

小川道子

曲りなりにも書いた卒業論文であるが、単なる土地利用の報告になってしまった。しかし，調査の目的は，山間盆地の主な土地利用である農業土地利用の現状を知り，それを基礎とする生活がいかなるものか理解することであったが，山村の生活は、調査しているうちに，わずかにのぞいたのみであった。

選んだ地域は，長野県東筑摩郡麻績村という山間の盆地である。本地域は第三紀層から成り、地辷りが頻発する地として有名な犀川丘陵の南部に位置する。

調査地域の地形は、大部分を占める南面斜面と，わずかの北面斜面と、唯一の平坦地である長細い河岸段丘とから成る。傾斜地といっても，本地域は幸いにも，比較的緩いのである。この広い斜面が，集落，農業，交通などの重要な舞台になっているので，調査の問題点も，傾斜地の土地利用ということにしぼった。

傾斜という因子に関しては，本丘陵内のどの地域よりも興味の少い所であるが，第三紀層，南向き，地下水，比較的冷涼な気候などの自然の因子に加えて，交通位置，歴史的背景，そして，本地域の農民の意欲などが組み合わさって，本地域特有の土地利用形態を生み出している。

傾斜地の土地利用は，云うまでもないが，非常に骨の折れるものである。傾斜地の耕地は，西南日本のように階段耕作にするのでもなく，自然の斜面をそのまま利用し，一筆の面積は狭く，住居から遠く離れている。農業経営において最も望まれるものは、耕地の交換分合であると，本地域の農民は云っている。

傾斜地では，土壌侵蝕が激しく起る上に，施肥その他の管理が困難であるから，生産力が劣ることはまぬがれない。本地域でも，これは概して当てはまるけれども，山地にも，質の良い土壌があり，平地以上に生産力の高い所もある。10°前後の傾斜，そして地質，土壌，気候の条件などから，本地域の土壌侵蝕も激しいのであるが，ここの人々は，それを意識せず，しかしながら無意識のうちに，土壌侵蝕に対して防止策を練っているようである。

斜面であればその向きが，問題になるわけである。日向斜面の利用率は，日影斜面のそれに比し高いとはいえ，それぞれ一長一短を持っている。本地域のように重粘土地帯であると、日照りに対して耐久力がない。逆に，生産力が低いといわれる日影斜面も，冷涼で，乾燥しにくいということを積極的に利用して，本地域では，白菜の商品栽培が盛んである。

傾斜地の土地利用は非常に粗放的である。本地域が冬期寒冷である為，全般に冬作が少いためもあるが，酷で，多くの労働を要する傾斜地であるから平地程には利用されない。犀川丘陵内では，本地域は，私々の換金作物がはいり，土地の利用度も高い方である。

傾斜地のより合理的な利用方法として，この利用率を高めるということも考えられるのであるが，機械化も進まず，労働力不足に悩む今日，決定的な解決方法を与えねばならない。その1つの方法として，耕地整理，農道敷設がある。

本地域の農業は多彩である。自給するには充分な穀類の生産を基礎に，できるだけ有利なものをと望んで土地利用も変化してきている。しかし，古いものをすっかり捨てるのではない。かつては，本地域でも，他の傾斜地でも最も重要な土地利用であった桑の栽培は，現在もなされ，収入の面でも稲に次いで大きな比重を占めている。すでに取り入れられ，今後も徐々に，桑園から変化していくであろう果樹園（りんご）、白菜，レタス，タマネギなどの蔬菜，そして畜産の為の牧草畑と，現在においては，可能な限り高度の土地利用が行われていると考えられる。

農業は，従来の主穀農業から，有畜農業へと方向が決っている。畜産を営むにも労働力の不足に悩む農家もあるが，社会の需要を見越して，畜産業に

重点を置く農家も多いのである。

本地域の土地利用は，現在，まだ確立されてはいないが，すべて傾斜地である本丘陵の他の地域に比し，紆余曲折多で，換金作物も多い。それは，本地域の自然条件に加えて，早くから開けた交通，大都市，この地方の都市と直結できる交通位置などによるものが大きい。

本地域は，いわゆる"山間の寒村"ではない。それどころか，生活すべてが，大都市，地方都市と密接に結ばれているのである。それだけに，農業人口は減る一方であろうし，農業の合理化のテンポが，それに追いつかないとしたら，どこかで，農業の合理化に一大飛躍が行なわれない限り，本地域の農業土地利用は，放棄されるであろう。

犀川丘陵南部の地形と土地利用

上條 さやか

犀川丘陵は長野県北部の南端に位置し，千曲川と犀川，土尻川に囲まれている丘陵性山地一帯である。*Fossa・Magna* 西部に位置して，軟弱な第三紀中新統の別所，青木，小田切層を主とする，山崩れ，地辷りの多い，かつ起伏が非常に複雑で，細かくみれば複雑な急傾斜面の組み合わさつた洪積世侵蝕面よりなる地域である。部分的に洪積段丘面，それに附随した沖積面が犀川に沿って分部している。

少しでも軟らかい地形部は悉く耕され，犀川沿いの低地は勿論，尾根，谷間，山腹まで処々に塊村状集落が散在する。地辷りによる緩斜面は生活に重要な意味をもっているのである。調査地域として，このような所に位置する生坂村をとり上げた。

本地域は県内でも後進山村といわれ，自然的にも社会的にも諸制約が多く他地域の農村の進歩から取り残された村である。どのような意味で後進的であり，どの様な制約が重なっているか，何らかの解決の糸口が引き出すことができればと，本村の農業の立地及び現状把握を試みた。勉強不足，実力のなさから現状把握が手一杯で，後進性の由来する地域性の分析は非常に不充分に終ってしまった。

本地域は70％十分主業農家で，最近兼業が増加してはいるが殆ど人夫日雇の不安定な農外所得の増大である。この様に農業依存度は高いが，如何なる形で農業が営まれているだろうか。

前述の如く耕地としては急傾斜地が圧倒的で，大部分が傾斜15°以上，中